



リリースノート

openSUSE Leap はお使いの PC やラップトップ、サーバなどで動作する、Linux ベースの自由なオペレーティングシステムです。Web の閲覧や電子メール／写真の管理、オフィス作業やビデオ／音楽の再生などを行なうことができます。お楽しみください！

発行日: 2018-05-14, : 15.0.20180514

目次

- 1 インストール 2
- 2 システムアップグレード 4
- 3 パッケージの変更について 5
- 4 デスクトップについて 5
- 5 セキュリティ 10
- 6 さらに詳しい情報とフィードバック 11

リリースノートは現在作成中の段階にあります。最新の情報を知るには、<https://ja.opensuse.org/openSUSE:%E3%83%AA%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%82%B9%E3%83%8E%E3%83%BC%E3%83%88> にあるオンライン版のリリースノートをお読みください。英語版のリリースノートは必要に応じて更新されますが、翻訳版のリリースノートは翻訳が追いつかず、一時的に不完全なものになる場合があります。

openSUSE Leap の旧バージョンからアップグレードした場合は、下記に示す旧バージョンのリリースノートもお読みください: http://ja.opensuse.org/openSUSE:Release_Notes

プロジェクトに関する情報は、<https://www.opensuse.org> をご覧ください。

本リリースに対してバグを報告する際は、openSUSE の提供する Bugzilla をお使いください。詳しくは <https://ja.opensuse.org/%E3%83%90%E3%82%B0%E3%83%AC%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%88> をお読みください。

1 インストール

本章には、インストールに関連する説明が書かれています。アップグレードに関する詳しい手順については、下記で公開されている文書をお読みください: <https://doc.opensuse.org/documentation/leap/startup/html/book.opensuse.startup/part.basics.html>

1.1 最小限のシステムインストールについて

最小限のシステムをインストールした場合、下記に示すとおり一般的に必要な機能がインストールされません:

- ソフトウェアファイアウォールのフロントエンドがインストールされません。必要であれば、firewalld パッケージをインストールしてお使いください。
- YaST がインストールされません。必要であれば、patterns-yast-yast2_basis パターンをインストールしてお使いください。

1.2 UEFI—Unified Extensible Firmware Interface

UEFI (Unified Extensible Firmware Interface) を利用して起動するシステムに openSUSE をインストールする場合、事前に製造元が推奨するファームウェア更新を必ずチェックし、可能であればインストールしておくことを強くお勧めします。Windows 8 もしくはそれ以降のバージョンがプレインストールされているマシンの場合、お使いのシステムが UEFI である可能性が高いものと思われます。

背景 UEFI のファームウェアによっては、UEFI のストレージ領域に多くのデータが書き込まれることで、起動に失敗してしまうバグを抱えています。もちろんこれはバグであるため、どれだけ「多くの」データを書き込むことで問題を発生させるのかは、誰にもわかりません。

openSUSE では、OS を起動するのに最低限必要となるデータ (UEFI に対して、openSUSE のブートローダの場所を示すための情報) しか書き込まないようにすることで、このバグの発生を最小化しています。Linux カーネルのオリジナル版では、UEFI のストレージ領域に起動やクラッシュに関する情報を書き込む機能 (pstore) がありますが、既定では無効化しています。ただし、バグである都合上、ハードウェアの製造元が推奨するファームウェア更新については、必ずインストールしておくことをお勧めします。

1.3 UEFI, GPT, MS-DOS の各パーティションについて

EFI/UEFI の仕様には、新しい形式のパーティションテーブル GPT (GUID パーティションテーブル) が定義されています。この新しい方式では、ユニークな GUID (識別子; 32 桁の 16 進数で表わされる 128 ビットの値) を利用してデバイスとパーティション種別を識別します。

これに加えて、UEFI の仕様では古い MBR (MS-DOS) 形式のパーティションテーブルにも対応しています。Linux のブートローダ (ELILO, GRUB 2) では、これらの古い形式のパーティションに対して、自動的に GUID を割り当ててファームウェア内に書き込もうとします。この場合、GUID は頻繁に変更されてしまうため、ファームウェアへの再書き込みも頻繁に発生することになります。この再書き込みには 2 つの操作、具体的には古い項目の削除と、それを置き換えるための新しい項目の作成が含まれます。

また、新しいファームウェアには、削除された項目を収集して古い項目用に確保したメモリを解放する、ガーベジコレクション機能が用意されています。ファームウェアに不具合があると、これらの古い項目を収集できなかったり、メモリを解放しなかったりする場合があります。これにより起動が不可能になる場合があります。

このような問題が発生した場合は、古い MBR 形式のパーティションを GPT 形式のパーティションに更新して、問題を回避してください。

1.4 nVidia ドライバを手作業でインストールする場合について

openSUSE Leap 15.0 では、.run シェルスクリプトアーカイブを利用して手作業で nVidia ドライバをインストールする場合、あらかじめ drm-kmp-default パッケージをアンインストールしておく必要があります:

```
zypper rm drm-kmp-default
```

nVidia が提供する RPM をインストールする場合は、このような問題は発生しません。これは、RPM パッケージが提供するドライバをインストールする際に、自動的に drm-kmp-default が置き換えられるようになっているためです。

なお、後日 nVidia ドライバをアンインストールする場合は、忘れずに drm-kmp-default パッケージをインストールしてください。

詳しくは https://bugzilla.suse.com/show_bug.cgi?id=1044816 をお読みください。

1.5 高 DPI ディスプレイのコンピュータにおけるインストーラ UI の表示について

既定では、YaST インストーラは高 DPI ディスプレイ環境において、正しい縮尺での表示が行なわれません。お使いのコンピュータが高 DPI ディスプレイの環境である場合は、起動時に設定を行なうことで YaST に自動で縮尺を設定させることができます。これを実施したい場合は、ブートローダのコマンドラインパラメータとして QT_AUTO_SCREEN_SCALE_FACTOR=1 を追加してください。

2 システムアップグレード

本章には、アップグレードに関する説明が書かれています。詳しいアップグレード手順については、下記で公開されている文書をお読みください: <https://doc.opensuse.org/documentation/leap/startup/html/book.opensuse.startup/cha.update.osuse.html>

このほか、3項「[パッケージの変更について](#)」についてもご覧ください。

2.1 openSUSE Leap 42.3 からのアップグレード

2.1.1 postfixadmin が後方互換性のないディレクトリレイアウトを使用している問題について

openSUSE Leap 15.0 で同梱されるようになったバージョン 3.2 では、Postfix Admin (postfixadmin パッケージ) は、新しく後方互換性のないディレクトリレイアウトを使用するようになっています。

- 設定ファイルが /etc/postfixadmin に移動されています。
- PHP コードが /usr/share/postfixadmin に移動されています。
- Smarty キャッシュが /var/cache/postfixadmin に移動されています。

Postfix Admin は、従来のディレクトリの設定を読み込むことは行なっておらず、自動での設定移行も行なっていません。そのため、下記の手順で設定を移行する必要があります：

- `config.local.php` を `/srv/www/htdocs/postfixadmin` から `/etc/postfixadmin` に移動します。
- `config.inc.php` をカスタマイズしている場合は、カスタマイズしている項目を `/etc/postfixadmin/config.local.php` で設定しなおします。なお、`config.inc.php` はそのまま変更せず残しておくことをお勧めします。
- Apache 側の設定では、`/postfixadmin` の別名定義 (エイリアス) を追加するか、有効にします：

- 全ての仮想ホストに対して別名定義を有効化するには、下記のように実行します：

```
a2enflag POSTFIXADMIN && rcapache2 restart
```

- 特定の仮想ホストに対してのみ別名定義を有効にするには、対象の仮想ホストの設定内に、別名定義を設定してください。

3 パッケージの変更について

3.1 廃止予定のパッケージについて

廃止予定のパッケージは、ディストリビューションの一部として現在も配布されているものの、次期バージョンの openSUSE Leap で削除される予定になっているものを示しています。これらのパッケージは移行を目的として残されていますが、使用は推奨されず、更新を受け取れない可能性があります。

インストール済みのパッケージがメンテナンスされているかどうかを確認するには、`lifecycle-data-openSUSE` パッケージをインストールした後、下記のコマンドを実行してください：

```
zypper lifecycle
```

4 デスクトップについて

本章では、openSUSE Leap 15.0 のデスクトップ関連の問題や変更点を説明しています。

4.1 Wayland 環境での KDE におけるプロプライエタリ nVidia ドライバのサポートについて

KDE Plasma Wayland セッションは、プロプライエタリ版の nVidia ドライバでサポートしていません。KDE をお使いの場合で、プロプライエタリ版の nVidia ドライバをお使いの場合は、X セッションのままお使いください。

4.2 既定での修飾キーの設定について

openSUSE の以前のバージョンでは、通常のキーボードレイアウトに含まれていない文字を入力するため、修飾キーの設定が行なわれていました。たとえば「å」を入力したい場合、**Shift**–**右 Ctrl** を押して離したあと、**a** を 2 回押すことで実現できていました。

openSUSE Leap 15.0 では、**Shift**–**右 Ctrl** が期待通りに動作しなくなっているため、修飾キーの組み合わせ設定が行なわれていません。

- システム全体に対して修飾キーの組み合わせを設定するには、/etc/X11/Xmodmap ファイルを開いて、まずは下記のような行を探します:

```
[...]
!! Third example: Change right Control key to Compose key.
!! To do Compose Character, press this key and afterwards two
!! characters (e.g. `a' and `^' to get 342).
!remove Control = Control_R
!keysym Control_R = Multi_key
!add Control = Control_R
[...]
```

上記の例でコメントアウトを元に戻すには、行頭の **!** 文字を削除します。ただし、setxkbmap をお使いの場合は、Xmodmap の設定が上書きされ、元に戻ってしまうことに注意してください。

- ユーザ固有の修飾キー設定を行ないたい場合は、お使いのデスクトップに対応するキーボード設定ツールをお使いいただくか、コマンドラインツールである setxkbmap をお使いください:

```
setxkbmap [...] -option compose:COMPOSE_KEY
```

COMPOSE_KEY の値には、たとえば下記のようなものを設定することができます: ralt, lwin, rwin, menu, rctl, caps。

- このほか、修飾キーを利用せずに文字を入力する方法として、(日本語変換と同様に) IBus 入力メソッドを利用する方法もあります。

4.3 ログインマネージャとデスクトップセッションの設定方法に対する `update-alternatives` への移行について

従来のバージョンでは、`/etc/sysconfig` か YaST モジュールの `[/etc/sysconfig エディタ]` を利用することで、ログインマネージャとデスクトップセッションを設定していました。openSUSE Leap 15.0 では、これらの設定は `/etc/sysconfig` ではなく、alternatives システムを利用して設定するようになりました。

既定値を変更するには、下記の alternatives をお使いください:

- ログインマネージャ: `default-displaymanager`
- Wayland セッション: `default-waylandsession.desktop`
- X デスクトップセッション: `default-xsession.desktop`

たとえば `default-displaymanager` の設定を表示したい場合は、下記のように実行します:

```
sudo update-alternatives --display default-displaymanager
```

`default-displaymanager` を `xdm` に切り替えるには、下記のように実行します:

```
sudo update-alternatives --set default-displaymanager \  
/usr/lib/X11/displaymanagers/xdm
```

alternatives をグラフィカルに管理したい場合は、YaST モジュールの `[Alternatives]` をお使いいただくことができます。このモジュールをインストールするには、`yast2-alternatives` パッケージをインストールしてください。

4.4 GDM 以外を利用した場合に GNOME Shell でスクリーンロックができない問題について

SDDM や LightDM など、GDM 以外のログインマネージャを利用してログインし、GNOME Shell を利用した場合、画面をブランクにしたりロックしたりすることができなくなってしまうます。また、ログアウトせずにユーザを切り替える機能も、動作しなくなってしまうます。

GNOME Shell で画面をロックできるようにするには、下記のようにしてログインマネージャを GDM に切り替えます:

1. まずは `gdm` パッケージがインストールされていることを確認します。
2. 次に YaST を開いて、`[/etc/sysconfig エディタ]` を開きます。

3. [Desktop] > [Display manager] > [DISPLAYMANAGER] を選択します。
4. 表示されたテキストボックスに gdm と入力します。保存を行なうため、[OK] を押します。
5. 最後にシステムを再起動してください。

4.5 高 DPI ディスプレイのコンピュータにおける SDDM UI の表示について

KDE の既定のログインマネージャである SDDM は、既定では高 DPI ディスプレイ環境において、正しい縮尺での表示が行なわれません。お使いのコンピュータが高 DPI ディスプレイの環境である場合は、設定ファイル /etc/sddm.conf 内に設定を行なうことで、自動で縮尺を設定させることができます:

```
[XDisplay]
ServerArguments=-dpi DPI_設定
EnableHiDPI=true
```

なお、DPI_設定 の箇所には、設定したい DPI 値 (例: 192) を指定してください。最適な縮尺で表示したい場合は、既定の 96 DPI の整数倍の値を指定してお使いください。

4.6 高 DPI ディスプレイのコンピュータにおける YaST UI の表示について

既定では、YaST は高 DPI ディスプレイ環境において、正しい縮尺での表示が行なわれません。お使いのコンピュータが高 DPI ディスプレイの環境である場合は、起動時に設定を行なうことで YaST に自動で縮尺を設定させることができます。これを実施したい場合は、環境変数 QT_AUTO_SCREEN_SCALE_FACTOR=1 を設定してください。

4.7 Wayland 環境下の Firefox や Chromium で画面共有が動作しない問題について

Firefox と Chromium は、ビデオ会議アプリケーションなどの Web ベースツールなどで、画面全体や個別のアプリケーションウィンドウを共有することができます。ですが、この機能は Wayland セッションをお使いの場合、どのブラウザでもサポートされていません。

Firefox や Chromium をお使いの場合で、画面共有を利用したい場合は、X セッションをお使いください。

4.8 MP3 メディアファイルの再生について

MP3 メディアファイルを再生するためのコーデックが、標準のリポジトリ内で提供されるようになりました。

このデコーダを、Rhythmbox または Totem などの gstreamer ベースのアプリケーションやフレームワークで使用するには、[`gstreamer-plugins-ugly`](#) パッケージをインストールしてください。

4.9 LibreOffice で Type-1 フォントをサポートしない問題について

LibreOffice 5.3 およびそれ以降のバージョンでは、古い形式である Type-1 フォント (`.afm` や `.pfb` などの拡張子のフォントファイル) には対応しなくなりました。ほとんどのユーザにとって、この変更による影響はありません。なぜなら、現在提供されているフォントの多くは、TrueType 形式 (`.ttf`) や OpenType (`.otf`) 形式のフォントであるためです。

もしもこの問題でお悩みの場合は、古い Type-1 フォントを TrueType などの形式に変換したあと、そのフォントをお使いください。変換は、openSUSE 内に含まれている FontForge (`fontforge` パッケージ) で行なうことができます。また、このような変換をスクリプトで実施したい場合は、<https://fontforge.github.io/en-US/documentation/scripting/> (英語) をお読みください。

4.10 FreeType フォント描画方法の変更について

FreeType 2.6.4 では、新しい既定のグリフヒンティングインタプリタ (バージョン 38) が提供されるようになり、他のオペレーティングシステムに非常に近い表示を行なうようになっています。ですが、この仕組みは環境によっては「よりぼやけた」表示のように見えてしまう場合があります。以前の FreeType の描画方法に戻したい場合は、任意のレベル (システム全体、ユーザ単位、プログラム単位) で下記の環境変数を設定してください:

```
FREETYPE_PROPERTIES="truetype:interpreter-version=35"
```

4.11 KDE Plasma におけるブラウザ統合の有効化について

Firefox および Chromium/Chrome に対応する Plasma のブラウザ統合を利用することで、KDE のシステムツール経由でマルチメディアの状態を監視したり、ダウンロードを監視したりすることができるようになるほか、KDE Plasma デスクトップ内の [コマンドの実行 (Run Command)] バーから、ブラウザにアクセスすることができるようになります。

ブラウザ統合の機能は、相互に動作する下記の 2 種類のパーツから構成されています:

- デスクトップ側の機能としては、システムパッケージ `plasma-browser-integration` をインストールすることで、お使いいただけるようになります。
- ブラウザ側の機能としては、お使いのブラウザのアドオンストアでインストールする必要があります:
 - Firefox: <https://addons.mozilla.org/firefox/addon/plasma-integration/> 
 - Chromium/Chrome: <https://chrome.google.com/webstore/detail/plasma-integration/cimiefiaegbelhefglklhahakcgmhkai> 

ただし、この機能は現在も開発途中のものであり、openSUSE Leap 15.0 では早期バージョンとして公開されているものになります。

4.12 Emacs の `psgml` モジュールの読み込みについて

既定のインストールでは emacs モジュール間で競合が発生することから、openSUSE Leap 15.0 では `psgml` モジュールを自動では読み込まなくなっています。詳しくは `README` ファイル (`psgml` パッケージ内) をお読みください。

5 セキュリティ

本章では、openSUSE Leap 15.0 におけるセキュリティ機能の変更について説明しています。

5.1 `systemctl stop apparmor` が動作しない問題について

以前のバージョンでは、`systemctl` のサブコマンド `reload` と `restart` は似たような名前であるため、動作の違いに気付きにくくなってしまっていました:

- `systemctl reload apparmor` は、全ての AppArmor プロファイルを再読み込みします (これは、AppArmor のプロファイルを再読み込みさせる方法としては、現在も将来も適切な方法です)。
- `systemctl restart apparmor` は AppArmor をいったん停止させ、全てのプロファイルの読み込みを開放したあと、起動し直します。この方法では、既存のプロセスに対する制約が解除されてしまい、新しく起動したプロセスのみが制約の対象となってしまいます。

残念なことに `systemd` では、各ユニット (サービスを記述するファイル) 内で `restart` の動作を変更することができず、解決できない仕組みになってしまっています。

そのため、AppArmor 2.12 以降のバージョンでは `systemctl stop apparmor` を動作しないようにしました。この動作変更により、`systemctl restart apparmor` でも、適切に AppArmor プロファイルを再読み込みできるようになっています。

逆に、全ての AppArmor プロファイルの読み込みを開放するために、`aa-teardown` と呼ばれるコマンドを提供するようにしました。これは従来の `systemctl stop apparmor` の動作と同じ意味を持ちます。

詳しくは https://bugzilla.opensuse.org/show_bug.cgi?id=996520 と https://bugzilla.opensuse.org/show_bug.cgi?id=853019 をお読みください。

6 さらに詳しい情報とフィードバック

- まずはメディア内の `README` 文書をお読みください。
- また、特定のパッケージに対する詳細な変更点を RPM パッケージから表示するには、下記のコマンドを実行します:

```
rpm --changelog -qp FILENAME.rpm
```

`ファイル名` の箇所を RPM の名前に置き換えてお使いください。

- また、メディアのルートディレクトリには `ChangeLog` ファイルがあります。ここには、更新されたパッケージに対する全ての変更点が時系列順に並んでいます。
- そのほか、メディアの `docu` ディレクトリには、さらに詳しい情報があります。
- 追加のドキュメンテーションや更新されたドキュメンテーションをお読みにになりたい場合は、<https://doc.opensuse.org/> をご覧ください。
- また、openSUSE からの最新の製品ニュースについては、<https://www.opensuse.org> をご覧ください。

Copyright © SUSE LLC